

戦前におけるツーバイフォー導入の歴史は、まさにわが国の住宅の近代化の歴史であったと語る内田青蔵教授。そこで、日本に導入されたツーバイフォー建築が日本の住宅にもたらした影響や、住宅の近代化を象徴するエピソードについて、改めてお話しいただきました。

【前編】

戦前のツーバイフォー建築が日本の住宅に与えた影響とは



神奈川大学の内田青蔵教授。「日本の住宅の変遷において、戦前のツーバイフォー導入はさまざまな影響をもたらした」と語る。



明治6年に完成した札幌の開拓使本庁分局庁舎。明治2年刊行のパターンブック『National Architect』の掲載図面(右図)をもとにデザインされた。

から世界の共通スタイルである椅子座へ移行させたいと考えました。幼少期に厳しくつけられて正座を課せられた彼は、訪米で椅子座に出会い、気苦勞なく暮らせる自由さに惹かれ、アメリカ式住宅に理想形を見出したのです。

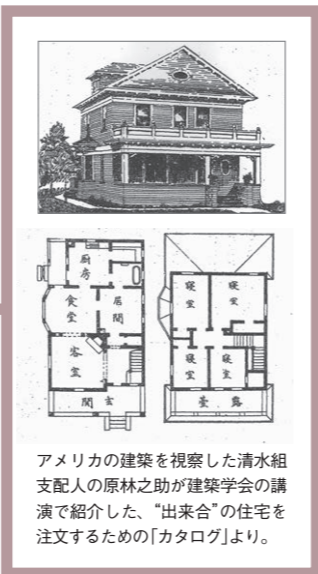
「デザインや生活スタイルだけでなく、住宅生産・部品の合理性を取り入れられました」

アメリカ式住宅は日本の新しい住宅のモデルとして、デザインや生活スタイルに注目が集まりましたが、次第に理解度が深まるにつれ、構造が革新的で「素人でも造れる」「合理的」ということがわかってきました。そして、日本と大きく違うアメリカ式新構造は、日本の建築の近代化に良い影響を与えるのではないかと認識されるようになりしました。

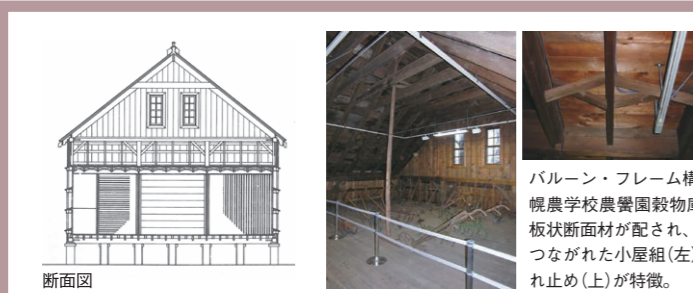
とくに心が寄せられたのは、アメリカでは住宅を1つの商品として捉えているというアメリカの住宅生産・部品の合理性でした。この考え方を取り入れることにより日本の住宅づくりの意識が変わり、近代化がより進んだのです。

「教師、建築家、デパート支店長など、志をもつ人たちによって、さまざまな試みが展開されました」

大工が書物(パターンブック)を見ながらアメリカ式住宅を造ろうとしても日本の要素が残ってしまい、アメリカと同じものを作るには限界がありました。そこで、旧札幌農学校の教師たちは農場施設の建設にあたり、デザインはもとよりバルーン・フレーム構造(ツーバイフォー工法の原型)自体の導入・習熟を目指しました。その新構造で施設を建てることは、日本でこれからアメリカナイズの洗練された建物を造っていくために、アメリカと同じ教育を行いたい



アメリカの建築を視察した清水組支配人の原林之助が建築学会の講演で紹介した、「出来合」の住宅を注文するための「カタログ」より。



バルーン・フレーム構造による旧札幌農学校農園穀物庫(明治10年)。板状断面材が配され、垂木つなぎでつながれた小屋組(左)や2階床の振れ止め(上)が特徴。

【はじめに】

日本の住宅は、戦後のみならず戦前もアメリカの影響を強く受けていました。アメリカはヨーロッパのような伝統がなかった代わりに建築を自由に造り、ツーバイフォーに代表される新しい構造を取り入れていました。しかし、その構造が日本で注目されるのはまだ先のことで、最初に持ち込まれたのはアメリカ式の生活スタイルやデザインでした。

「住まいは家族の場」「住宅は自分で考える」「床座から椅子座」という時代へ

ご承知の通り、日本の昔の武家住宅は自分たちの生活空間よりも座敷を第一にするという間取りでした。しかし明治になって、外国人から「住まいは日常的な空間を大切にするのが本来の姿ではないか」と批判されるようになりました。次第に日本人も「住まいは家族の生活の場」と捉え直し、女性や子供など「弱者」といわれていた人たちに使い勝手のよい居間空間が造られるようになりました。アメリカ式住宅にはそういう新しい間取りの可能性を感じさせるものがありました。これまで日本は、大工さんにすべて任せて造ってもらっていましたが、自分たちの気に入るものにしよう、自分の住まいは自分で考えていくという時代が変わっていったのです。

「あめりか屋」の創設者である橋口信助は、日本の生活様式を床座



建築家小笹三郎がアメリカから導入したプラット・フォーム構造で建てた小野友次郎邸(明治45年)。

「あめりか屋」の橋口信助が輸入し、販売・建設した住宅(明治43年~)。

銀座松屋支店長の内藤彦一がアメリカン・ポータブル・ハウス社の組立住宅を輸入し、鶴沼海岸に建てた木造平屋建ての別荘(大正9年)。

いう意識の表れだったのだと思います。

また、バルーン・フレーム構造は「あめりか屋」の橋口により、輸入住宅を通して持ち込まれるかたちとなり、さらに、明治末期には、シアトルで建築活動に従事し、帰国後、工務所を構えた小笹三郎によって、プラット・フォーム構造(バルーン・フレーム構造)を発展させたもので、日本のツーバイフォー工法の基本形)が導入され、住宅が建てられました。

大正時代になり、アメリカ式住宅がますます話題になると、銀座のデパート「松屋」の支店長内藤彦一は、百貨店は衣食住すべてを商うところと考え、その販売に目をつけました。そこで本心に住み心地がよいかを調べるため、自ら輸入し別荘として建てて使ってみました。その後、販売にたどり着いたかは定かではありませんが、新しい住宅のかたちを求める機運が高まっていったのです。

※2018年夏号では、後編として、アメリカ式住宅から日本のツーバイフォー住宅に至るまでの歴史を内田教授にご紹介いただきます。

■図版出典
池上重康「明治初期日本政府蒐集船載建築書の研究」北海道大学出版会 2011年より転載
※図版：国立公文書館所蔵
越野武「北海道における明治初期洋風建築の研究」北海道大学図書刊行会 1993年より転載
その他 当協会会報誌「ツーバイフォー」Vol.213~216内「日本のツーバイフォー建築の歴史」より転載